

## トマトすすかび病 の発生について

### 1 発生の経緯

平成22年11月、宮城県内の施設栽培トマトのトマト葉かび病耐病性品種において、トマト葉かび病と酷似した病斑が確認され、宮城県農業・園芸総合研究所において同定を行ったところ、*Pseudocercospora fuligena* (Roldan) Deightonによるトマトすすかび病と確認された。本病は平成8年に宮崎県で発生が確認されて以来、現在までに1府23県で発生が確認されている。

### 2 発生状況

- (1) 発生作物 トマト
- (2) 発生品種 CF桃太郎ファイト
- (3) 病害名 トマトすすかび病  
病原菌 *Pseudocercospora fuligena* (Roldan) Deighton

### 3 病徴と被害

- (1) 本病は葉に発生し、初め葉の裏側に不明瞭な淡黄緑色の病斑が現れ、やがて灰褐色粉状のかびを生ずる。病斑は次第に拡大し、病勢の進展とともに、円形あるいは葉脈に囲まれた不整形病斑となり、灰褐色から黒褐色に変わる(図1)。
- (2) 葉の表面には、裏面よりやや遅れて、不明瞭な淡黄褐色の病斑を生じ、かびを生じるが裏面に比べて少ない(図2)。
- (3) 被害葉は早期に垂下、乾燥巻縮して、全葉が濃緑褐色のかびで覆われる。
- (4) 病徴は葉かび病に類似しており、肉眼での判別は困難である。



図1 トマトすすかび病の病徴(葉裏)



図2 トマトすすかび病の病徴(葉表)

### 4 病原菌の性質と伝染

- (1) 糸状菌の一種で不完全菌類に属する。菌糸の発育適温は26～28℃，分生子の形成適温は18～22℃，分生子の発芽適温26℃付近である。
- (2) 分生子は細長い糸状(縦径13.3～170.3μm×横径2.7～5.6μm)であり、形状でトマト葉かび病と容易に区別できる(図3，図4)。
- (3) トマト品種の葉かび病耐病性の有無にかかわらず発病し、葉かび病と混発することもある。
- (4) 被害植物の残渣で越冬し、翌年の伝染源となる。多湿条件で発病しやすく、密植、過繁茂、換気不十分の施設栽培で発病しやすい。



図3 トマトすすかび病の分生子

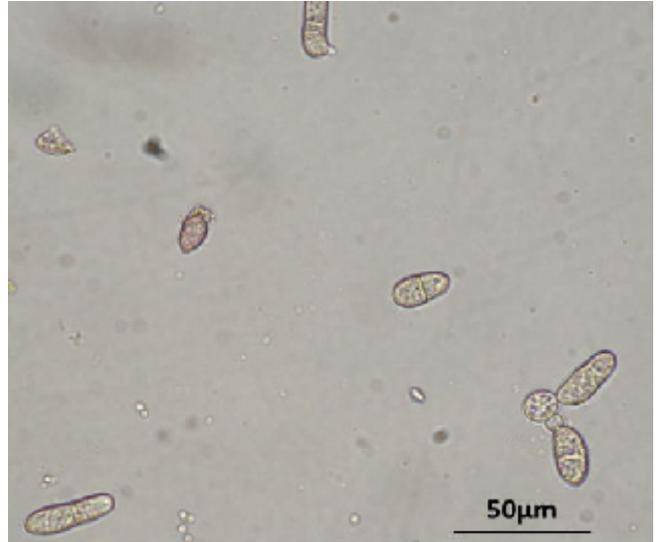


図4 トマト葉かび病の分生子

写真(図1～4):宮城県農業・園芸総合研究所園芸環境部撮影

## 5 防除対策

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、密植、過繁茂を避けるとともに、換気による湿度管理に留意する。
- (2) 発病葉や被害残渣は伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- (3) 定期的に薬剤防除を行う(表1)。

表1 トマトすすかび病の登録薬剤(平成22年12月1日現在)

薬剤名	使用時期	使用回数	希釈倍数	トマト葉かび病との同時防除
アミスターオプティフロアブル (アゾキシストロピン・TPN水和剤)	収穫前日まで	4回以内	1000倍	可
スコア顆粒水和剤 (ジフェノコナゾール水和剤)	収穫前日まで	3回以内	2000倍	可
ダイアメリットDF (イミノクタジンアルベシル酸塩・ポリオキシシン水和剤)	収穫前日まで	3回以内	1500倍	可
ダコニール1000 (TPN水和剤)	収穫前日まで	4回以内	1000倍	可
トリフミン水和剤 (トリフルミゾール水和剤)	収穫前日まで	5回以内	3000倍	可
ブリザード水和剤 (シモキサニル・TPN水和剤)	収穫前日まで	3回以内	1200倍	可
ベルコートフロアブル (イミノクタジンアルベシル酸塩水和剤)	収穫前日まで	3回以内	2000倍	可
Zポルドー (銅水和剤)	-	-	500倍	不可

農薬の使用に当たっては最新の登録情報をご確認ください。

この病害に関するお問い合わせは下記まで

### 宮城県病害虫防除所予察班

〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町4番17号(宮城県仙台合同庁舎内)

Tel 022 - 275 - 8982, Fax 022 - 276 - 0429

<http://www.pref.miyagi.jp/byogai/>

### 宮城県農業・園芸総合研究所園芸環境部

〒981-1243 名取市高舘川上字東金剛寺1番地

[http://www.pref.miyagi.jp/res\\_center/](http://www.pref.miyagi.jp/res_center/)

Tel 022 - 383 - 8125, Fax 022 - 383 - 9907